

# 日本ラグビーの時代の移り変わりの一考察

## Some thoughts concerning about history of rugby in Japan

1K05B107

指導教員

主査 石井昌幸先生

佐藤 晴紀

副査 寒川恒夫先生

### はじめに

ラグビーが日本に伝わり、どのようにして広まっていたのか、時代によっての特徴、変化の意味は何なのかなどについては、「当事者」である私も含めたラグビーをやっている人でさえ、十分に知られているとは思えないのが現実である。私自身、実際にラグビーを小さい時から始め17年間やってきたものの、日本のラグビーについて詳しいことはわかっていない。大学生活の集大成としてもそうだが、ラグビーをやっている人間としての集大成として作成する卒業論文において、日本ラグビーを題材として取り扱い、今後のラグビー人生に役立てていく為にも改めて日本のラグビーに関して理解を深めたい。

### 第1章 日本ラグビーの始まり

日本ラグビーフットボールの歴史は、明治32年、西暦1899年から始まる。明治32年といえば、日清戦争のあと、日露戦争のまえで、ちょうどその中間の頃。明治開国以来の文明開化の潮流が、一段と高潮し、欧米風のものなら、洋館、洋装、洋食となんでもとり入れられる時代であったとされている。近代スポーツが日本に移入されてくるのも、決して例外ではなく、この年の頃までには、野球(明治6、7年創始)と庭球(明治11年創始)がごく一部の学校にはいっただけである。

そんな中、慶応義塾大学予科の一語学講師として就任したイギリス人、エドワード・ブラムウェル・クラークがケンブリッジ大学で自ら体験したラグビーを、同じく同大学で学んだ田中銀之助の協力のもとに、慶応義塾の学生たちに直接指導した

のが日本ラグビーの最初である。

### 第2章 昭和にはいつてからのラグビー

この年代では、創立直後と比べ、試合をする機会も多くなり、海外のチームを招待するようになった。さらに、各大学が戦術戦法を考え、試合での戦い方が大きく変わった。忘れてはいけないのが、日本ラグビー協会の設立である。この出来事はラグビー界を大きく飛躍する出来事であったが、同時に、これらのことを、脅かす歴史的な大事件の戦争が起きてしまう悲しい年代でもあった。

戦争が起きている中でも、ラグビーは途切れることなく続けられ、最後の最後までラグビーをやり、戦場に飛び立った部員達の無念の思いは、現代の学生生活では想像できないことである。この人達が国のために戦場で戦ってくれたおかげで、今の日本ラグビーが存在するのである。

### 第3章 戦後のラグビー

壮絶な戦争は原爆が投下され、昭和20年8月14日、ポツダム宣言を受諾して、戦争は敗戦というかたちで終わりを迎えた。生活も文化も壊滅寸前まで追い込まれていた日本のなかで、ラグビーは国の復興の先陣を切り、早くもこの年の9月に試合を行い、日本ラグビーの復興をアピールした。ラグビー復興の軌道に乗り始め、昭和39年3月には、日本協会の主催で、大学王者と社会人王者で戦う真の日本一を決める日本選手権が開催される。そして現在、ラグビー人気は低迷している。その要因といえることは、野球やサッカーのようにプロ化されていないという現状である。近年になっ

て社会人ラグビーがトップリーグと名称を新たにし、プロ化の動きが出てきている。今年も、世界的にも大きな動きがあった。試験的ではあるが、ルールが改正されたのである。

### 終わりに

今現在ラグビーをやっている人でどれだけの人が、日本ラグビーの起源を知っているのだろうか。また、戦争でやりたくてもラグビーをやれず、

戦死した人達の無念さを知っているだろうか。これらの日本ラグビーの原点ともいえることを、しっかりと認識していなければ、ラグビーの人気を回復するなど、軽い考えでは言えないであろう。さらに、他の人達に呼びかけても説得力はないであろう。ラグビーの歴史を学び、現状を知り、今後のラグビー界を考えていくためにも、改めて考えることが必要である。